

は、リンパ管腫と診断された。

以上、組織学的検索では、良性の所見にもかかわらず、臨床的には、比較的急激に気管圧迫をきたし、呼吸困難を主訴とした縦隔腫瘍2例の治験例を経験した。

### 34. 単純性股関節炎の病像の検討

(第二病院 整形外科)

○大野 博子・菅原 幸子・上田 禮子・  
石上 宮子・藤原 英士・大友 正孝

単純性股関節炎は、小児期に多く亜急性の股関節痛と運動制限をもって発症し、一過性で予後の良い疾患とされており、我々が日常比較的多く遭遇する疾患である。その病因として感染説、アレルギー説、外傷説等があり、未だ確定されていない。かつては股関節結核との鑑別が大切で、それゆえ Observation hip と名付けられたが、最近ではむしろいわゆる生長期痛、Perthes 病、Psychosomatic disease 等との鑑別が必要となってきた。我々は昭和53年から現在までの5年間に単純性股関節炎と診断した症例について、その臨床像の分析調査を行なった。

外来症例17例、入院症例40例、総計57症例で、発症年齢は2～11歳で、4～8歳が大多数を占める。男34例、女23例で男に多く、罹患側は右、左、両股の順であった。誘因としては上気道感染13例、水痘2例、耳下腺炎1例、MCLS 1例、スポーツ外傷10例であった。検査成績では赤沈値亢進(1時間15mm以上)を示す症例は10例で、X線像は大多数の症例で正常像を示すが、8例に関節裂隙の拡大をみた。局所所見は股関節の圧痛、運動制限がほぼ全例に認められ、屈曲、伸展、廻旋(特に内旋)制限が著明であった。股関節液貯留のみられた症例は12例で、関節液の性状は2例を除いて清明で、混濁は認められない。症状軽快までに要した日数は、外来治療では3～21日、平均10.1日、入院治療では2～28日、平均11.0日であった。再発症例は4例あり、そのうち1例は3度に亘り罹患している。その他 Perthes 病の初期と判明した1例、Depression の1病像であった症例が1例あり、その詳細および鑑別点についても報告する。

### 35. 3歳の幼児に発生した若年型顆粒膜細胞腫の1例

(第二病院 産婦人科)

○稻生由起子・清水 雄二・黄 長華・  
井口登美子・高橋 文子

幼小児の卵巣腫瘍は稀な疾患とされているが、最近

我々は、3歳の幼児に性早熟徴候を呈した卵巣腫瘍の1例を経験したので報告する。

症例は、3歳で、家族歴、既往歴に特記すべきことなし。現病歴は、昭和57年9月初旬より黄色帯下、乳房肥大に母親が気づき、小児科受診。性早熟症として精査中、同年12月初旬より血性帯下を認め、当科初診。

初診時、身長体重は、年齢相応の発育であるが、乳房肥大、乳輪部の色素沈着、外陰部の正常婦人様発育を認め、直腸診にて左下腹部に小鶏卵大の腫瘤を触知し、ホルモン産生卵巣腫瘍の疑いにて入院。

検査成績は、血液尿検査、DIP、胃腸透視など異常を認めず、ホルモン検査では、尿中 Estrogen 値が高値を示す以外、特に異常なし。染色体は46, XX 正常、女性型。CT scan, B scan にも左下腹部に5 cm 径の soft tissue mass を認めた。

昭和58年1月20日左卵巣摘出術施行。手術時、腹腔内に少量の腹水を認め、左卵巣は、小鶏卵大弾力軟、周囲臓器との癒着はなく、右卵巣、子宮、両側卵管に異常は認めなかった。摘出術は、重量50g、断面は、多胞性のう腫部分と黄色髓様性充実部分から成り、病理組織学的には異型性の非常に強い若年型顆粒膜細胞腫と診断された。

術後経過は順調で、術後2日目に尿中 Estrogen 値は低下、性器出血、乳房肥大も漸次消失した。現在、VAC 療法で化学療法中である。組織学的には、現在なお検索中であるが、若干の文献的考察を加えて報告する。

### 36. 炭酸ガスレーザーによる舌リンパ管腫の手術

(第二病院 耳鼻科)

○梅田 陽子・荒牧 元・  
相澤 晴子・片山 修

目的

口腔内の血管腫やリンパ管腫は比較的稀な疾患であるが、易出血、境界不鮮明、術野が狭い、等により、外科的切除が行なわれずに放置されている例がみられる。

最近、レーザー手術が耳鼻科領域にもとり入れられ、外科的療法としての有用性が述べられるようになった。

我々は、舌リンパ管腫に炭酸ガスレーザー手術を行ない、良好な結果を得たので、その手術および術後経過について報告する。

症例

13歳男性。3年前より舌背の膨隆に気づいたが、他の自覚症状および増大傾向はなく、放置していた。初